

第3章 周辺の遺跡

1 四国地域の縄文時代草創期・早期 (図7)

四国地域における縄文時代草創期の様相については、主に愛媛県の上黒岩遺跡、穴神洞遺跡、高知県の不動ヶ岩屋洞穴遺跡などの1960～70年代に調査された洞穴・岩陰遺跡の成果に拠るところが大きく、それらをもとに理解されている。草創期の遺跡は、現在のところ、約120箇所にもおよ

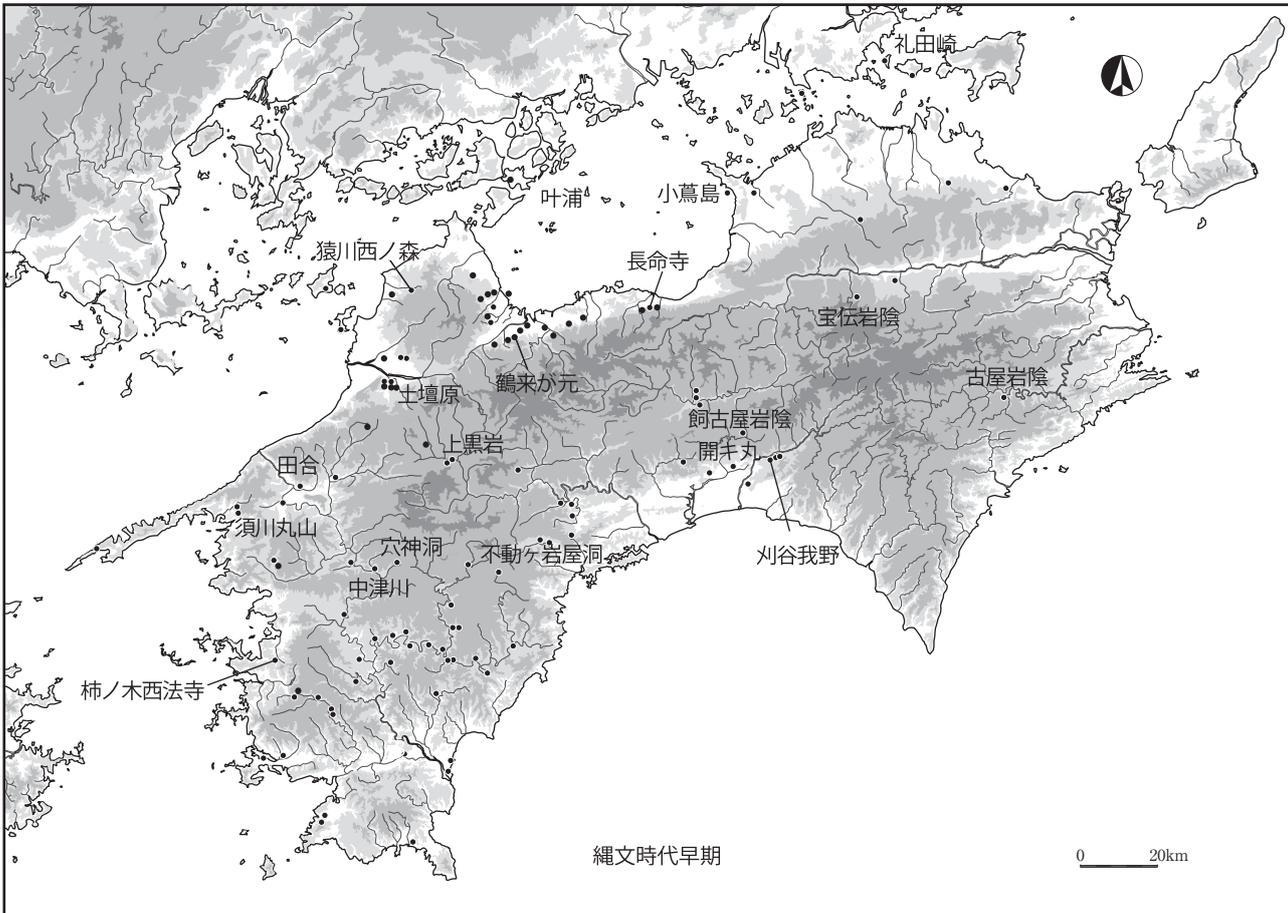
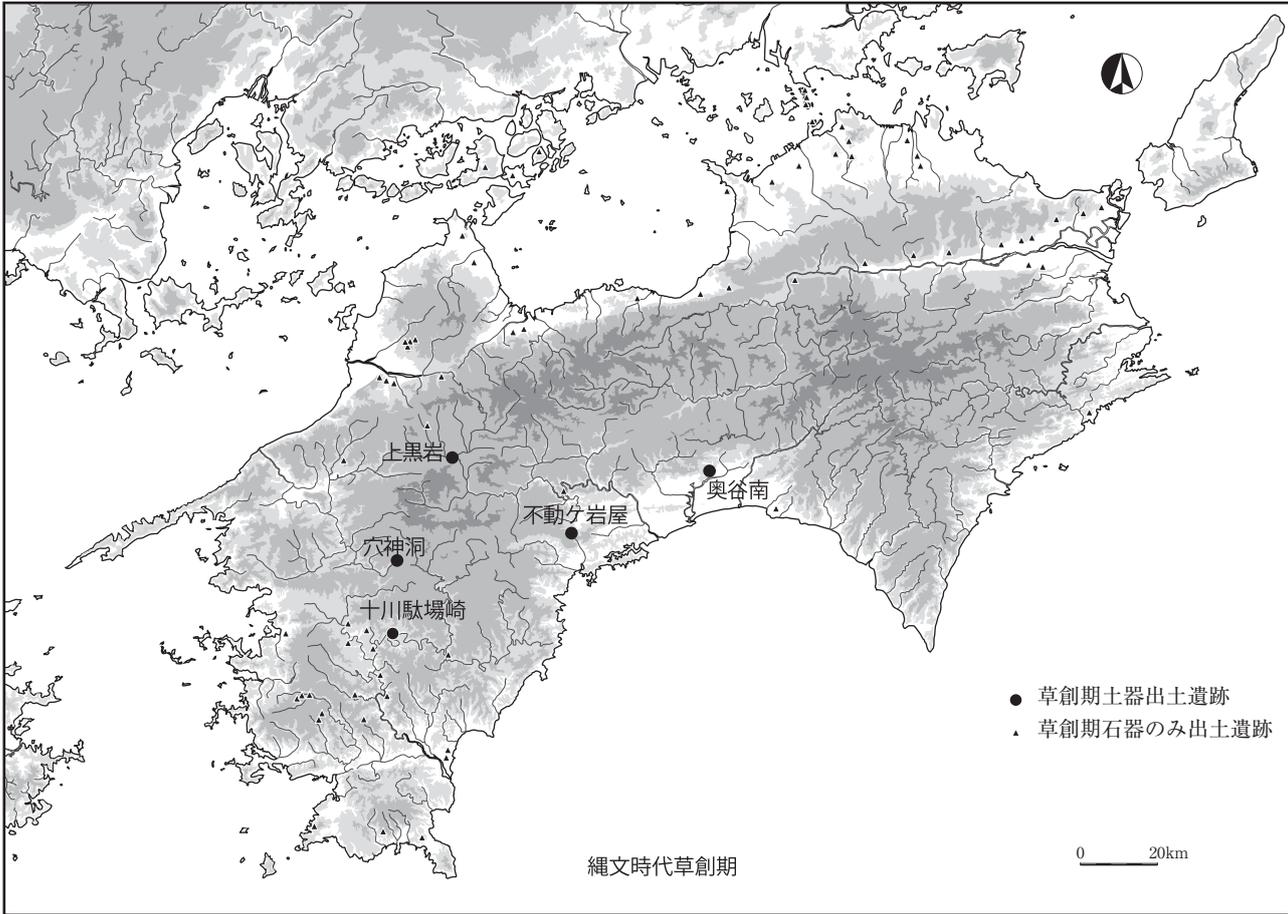


図7 四国地方の縄文時代草創期～早期遺跡の分布

ぶが、その多くは有舌尖頭器や石斧が単独出土あるいは採集されている遺跡で占められている。このうち草創期の土器が確認されている遺跡は、久万高原町上黒岩遺跡、西予市穴神洞遺跡（以上、愛媛県）、奥谷南遺跡、不動ヶ岩屋洞穴遺跡、十川駄馬崎遺跡（以上、高知県）の5遺跡で出土しており、密な分布を示すような現象は認められない。香川県羽佐島遺跡のC10-1南東ピットで尖頭器とともに無文土器1点が出土しているとの報告があるが、それらはナイフ形石器などとも共伴しているため、草創期の所産としては疑問が持たれている。

草創期に属する土器については、土器型式の変遷の中で一般的に考えられている隆起線文→爪形文→多縄文という経過は、爪形文や多縄文が存在していないため、そのまま踏襲することはできない。四国地域では、上黒岩9層、穴神洞8層、不動ヶ岩屋洞穴などで出土した隆起線文土器が主流である。穴神洞遺跡の第1文化層では、口縁部から胴部にかけて7条の隆起線文が施された土器が出土している。1964・66年に調査の行われた不動ヶ岩屋洞穴遺跡では、1条の隆起線文が認められる土器とともに有舌尖頭器が出土している。十川駄馬崎遺跡では5次調査において、1区7層から無文土器、同区9層からは隆起線文土器が出土しているが、ともに小破片であるため不明な点も多い。また、同遺跡3次調査の5層上部からは豆粒文土器が出土し、注目を集めた。旧石器時代から続く岩陰遺跡である奥谷南遺跡では隆帯文土器が出土し、それと伴に槍先形尖頭器や局部磨製石斧も出土している。これらの隆起線文土器に後続する土器群としては、上黒岩6層や穴神洞6層の成果から無文土器・条痕文土器が位置付けられ、隆起線文土器→無文土器・条痕文土器の流れで理解されている。

石器については、おおよそ有舌尖頭器を主体とする石器群と、石斧を主体とする石器群に大別でき、この両者には分布の偏りが見られ、地域差の存在が認められる。瀬戸内海に面する地域では有舌尖頭器が帯状に分布し、石斧については四国西南部を流れている四万十川流域を中心とした地域で多く確認されている。石器石材については前者でサヌカイトを、後者では頁岩やチャートを主に利用している傾向がある。こうした二極化を示す分布状況の要因としては、豊後水道に面する四国西南域は、東・南九州地域との関連が指摘されている〔多田2002ほか〕。

縄文時代早期の遺跡については115遺跡を数えることができる。その遺跡分布については、各地域によって調査の精査に違いがあるため、その分布は流動的ではあるが、現時点では愛媛県および高知県西部を範囲とする西四国に集中している傾向が確認できる〔兵頭2006〕。土器については押型文土器、無文土器、条痕文土器、撚糸文土器などが出土している。とくに押型文土器については近年資料が増加しており、神宮寺式～穂谷式までの土器型式が確認されるものの、その多くは黄島式に併行する土器群である。石器組成については早期に属するものとして明確に示すことのできる資料は少ないが、石鏃・凹石・磨石の増加、トロトロ石器の出現などの傾向が認められる。石材利用についてはサヌカイトやチャートを主体的に利用しながらも、当該期からは姫島産黒曜石の利用が開始する点は、東九州地域との交流を考える上でも重要といえる。

2 久万高原町の遺跡（図8・表1）

松山市側から標高720mの三坂峠を越えて達する久万高原町は、久万町、面河村、美川村、柳谷

村の1町3村が合併して平成16年に誕生した。久万高原町は四国山地の中腹に位置し、1,000m級の急峻な山々に囲まれた地域である。その気候は山岳地特有の冷涼多雨であり、直線距離で15kmほどの松山平野とは平均気温でおよそ3～4℃ほど低く、年間降水量は500mm以上多いこともある。また、冬季の寒冷な気候は長い期間にわたって積雪をとめない、農林業や交通等の生活面において大きな影響を与えている。現在の久万高原町では高齢・過疎化の進行が著しいものの、緑豊かな自然に恵まれた場所であり、名勝地や史跡の多い地域としても知られている。また山間部ということもあり、農業や林業を生業としており、高原野菜や木材、お茶などが名産である。

こうした久万高原町における考古学的な初見は、1954年に標高720mの旧久万町父二峰芋坂において、開拓者の白岡貞一により縄文土器を発見したのが嚆矢であった。これ以降はすぐに遺跡の発見が続くことはなく、この地で考古学的な調査が本格化するのには1960年代に入ってからである。その先駆的な調査となったのが、上黒岩遺跡(1961～70年)である。同遺跡の発掘調査では、新たな発見が相次ぎ、その成果が全国的に発信されたことで、地元住民の考古学への関心を高めたと同時に、研究者が四国地域の山間部を注目するきっかけにもなった。この頃を境にして、久万高原町の遺跡が急増していることから、同遺跡の与えた影響が大きかったことがうかがえる。

また、その一因として、西田栄、松本重太郎らによる現地踏査などの活動があったことは言うまでもない。西田栄による報告[西田1961]では、愛媛県内の33箇所の縄文時代遺跡が紹介されているが、そのうちの1/3となる11遺跡が久万高原町の遺跡であった。その後の長井数秋の報告では、さらに7遺跡が補足され18遺跡と増加している[長井1975]。現在では30数遺跡を数え、愛媛県の中でも比較的、縄文時代の遺跡が集中している地域として知られている。しかし惜しむらくは、これらの遺跡の中で本格的な発掘調査を行った遺跡が少ない点である。実際に調査を行った遺跡は上黒岩、上黒岩第2岩陰、笛ヶ滝、宮ノ前、菅生台、山神の6遺跡が挙げられ、その性格が明らかになった遺跡は限られる。上黒岩遺跡の調査以降は、開発事業の少ない地域であるため、それ以上の考古学的な進展はみられず、新たに確認される遺跡は望めない状況であった。しかし近年では、地元の方によって遺物が採集されており、それまで空白地域であった黒藤川流域で遺跡が発見されるなど、その公開・展示など地道な活動も行われている。

次に、久万高原町における遺跡の分布についてみると、町の北部から西部にかけて連なる山々に源を発する有枝川、久万川、二名川などによって形成された河岸段丘上に位置している。具体的には、久万盆地、父二峰盆地、畑野川盆地の周辺部に圧倒的に多くみられ、その反面、面河川や直瀬川流域などでは少なく、僅かな遺物の採集や中世の山城が確認されている程度である。これは急峻な地形が多いことや、考古学的調査の少ないことが影響していると考えられるが、周辺地域の様相を考え合わせれば、今後の調査によってはそれに応じて遺跡の発見も増えていくと予想される。

久万高原町において、確実に旧石器時代まで遡る資料はこれまで報告されておらず、現在のところ、最も古い時期は縄文時代草創期となる。縄文時代の遺跡については30数箇所を確認されているが、その中でもやはり上黒岩遺跡は資料の質・量ともに突出している。縄文時代全般を通して遺物が出土し、近年では弥生時代前期、古墳時代前期初頭、中世の遺物についても報告されており[長井2006]、長い期間にわたって本岩陰を利用していたことがうかがえる。

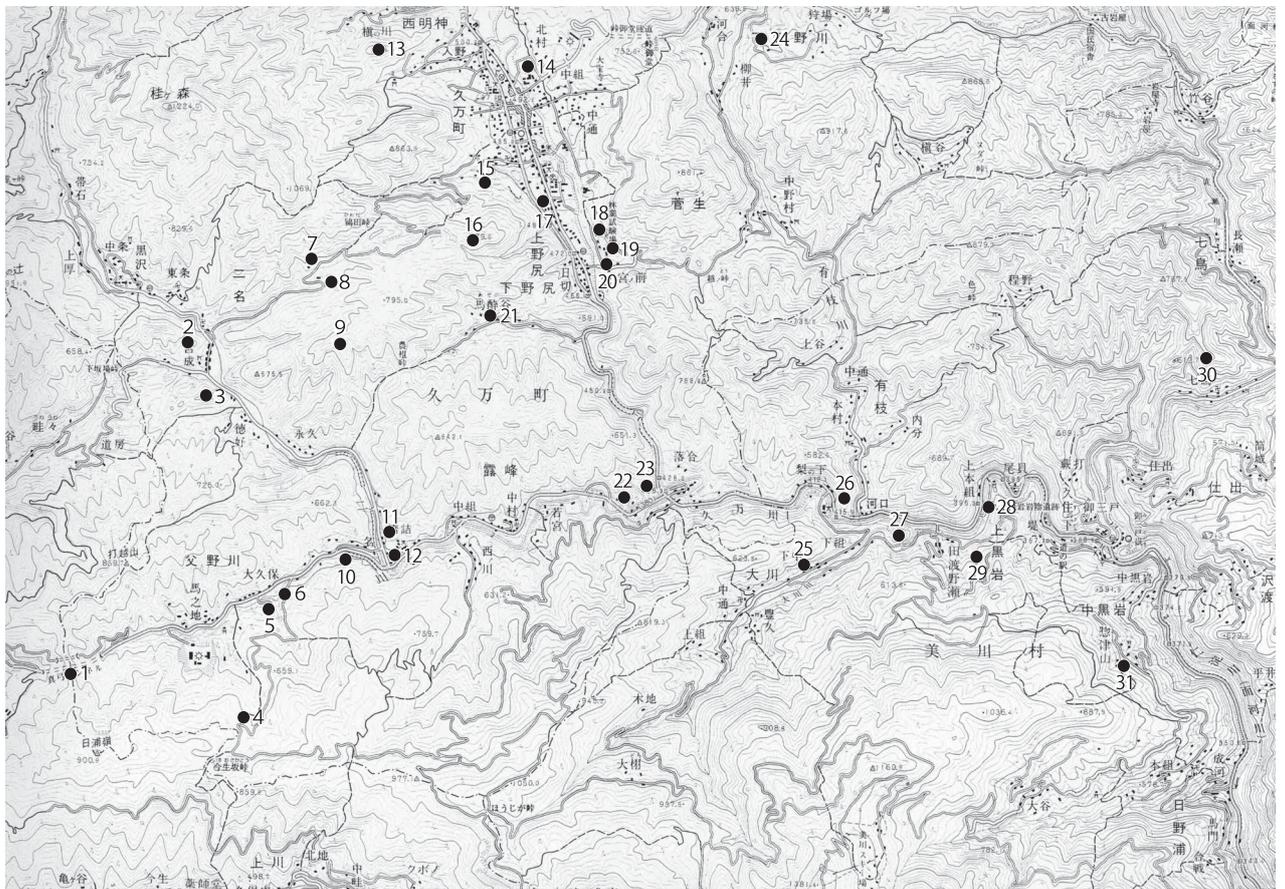
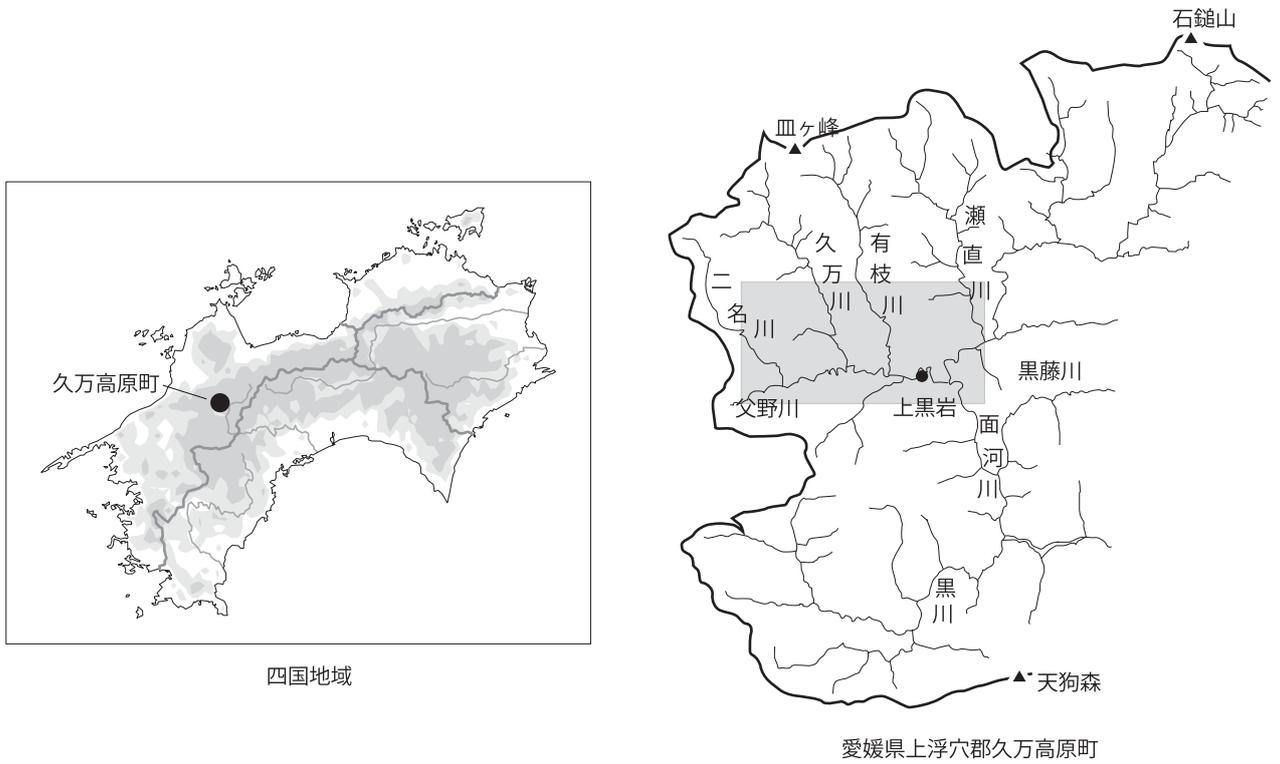


図8 上黒岩遺跡と周辺の遺跡の分布

それ以外の遺跡としては、草創期に属する資料として山神遺跡で尖頭器が採集されている。また、同遺跡では3基の集石遺構が検出されており、後期初頭の中津式をはじめとする、彦崎KⅡ式、福田KⅢ式、黒色磨研土器など縄文後期全般から晩期前半を通じて集落を形成している。笛ヶ滝遺跡は、1961年に広島大学考古学研究室と久万町教育委員会によって調査された遺跡であり、早期後葉の高山寺式～穂谷式に併行する土器群が出土しており、さらには西平式土器や十字形・三叉形石器、姫島産黒曜石製石鎌といった九州地域の要素を持った後期の遺物が出土している。二名川と父野川が合流する地域では、落合、橋詰、大久保、芋坂、生姜駄馬など縄文後期～晩期の遺跡が集中的に見られる。また、有枝川の河岸段丘上では東山遺跡や西峰遺跡が存在するなど、当地域では縄

表1 久万高原町の主な遺跡一覧

No.	遺跡名	ふりがな	所在地	縄文	弥生	古墳	古代	中世～	特記事項（遺構・遺物）
1	眉見（真弓）城跡	まゆみ	父野川馬ノ地					○	堀切
2	片山城跡	かたやま	二名乙 2511 ほか					○	曲輪・堀切
3	飯森城跡	いもり	二名 2633					○	堀切・腰曲輪
4	芋坂（今生坂）	いもざか	父野川芋坂	○					縄文土器・石器
5	大久保	おおくほ	父野川大久保	○					縄文土器・石器
6	父野川	ちちのかわ	父野川大久保	○					縄文土器・石器
7	由良野Ⅰ	ゆらのⅠ	二名由良野	○					縄文土器・石器
8	由良野Ⅱ	ゆらのⅡ	二名由良野	○					縄文土器・石器
9	虎太郎城跡	とらたろう	二名乙 411-1					○	曲輪・堀切・土塁・腰曲輪
10	生姜駄馬（父二峰）	しょうがだば	露峰橋詰	○					縄文土器・石器
11	橋詰Ⅰ	はしづめⅠ	露峰橋詰	○					縄文土器・石器
12	橋詰Ⅱ（早ノ瀬）	はしづめⅡ	露峰甲 410-1	○					縄文土器・石器
13	天神森城跡	てんじんがもり	入野乙 676-3					○	曲輪・堀切・土塁
14	沖屋敷跡	おき	菅生北村					○	
15	笛ヶ滝	ふえがたき	上野尻笛ヶ滝	○	○	○	○		縄文土器・石器
16	池峠（野尻）城跡	いけのとう	上野尻乙 342					○	曲輪・堀切
17	柳小路邸跡	やなぎこうじ	上野尻上ノ1					○	
18	宮ノ前	みやのまえ	菅生宮ノ前	○	○	○	○	○	縄文土器・石器・弥生土器
19	菅生台	すごうだい	菅生宮ノ前	○	○				縄文土器・石器
20	野尻屋敷跡	のじり	菅生宮ノ前					○	
21	アセブ大向	あせぶおおむかい	下野尻アセブ大向	○					縄文土器・石器
22	落合	おちあい	露峰橋詰	○					縄文土器・石器
23	尾首（長尾）城跡	おくび	露峰乙 161					○	堀切
24	西峰	にしみね	下畑野川西峰	○					縄文土器・石器
25	大川宝篋印塔	おおかわ	大川					○	宝篋印塔
26	高森城跡	たかもり	有枝					○	堀切
27	石本城跡	いしもと	大川					○	堀切
28	上黒岩岩陰	かみくろいわ	上黒岩	○	○	○	○	○	縄文土器・石器・人骨他
29	上黒岩第2岩陰	かみくろいわだい2	上黒岩	○					縄文土器・石器
30	城の台跡	しろのだい	上黒岩					○	
31	城山跡	しろやま	中黒岩					○	石積

文前～中期に属する遺跡については上黒岩遺跡を除いて皆無であるが、縄文後期になると遺跡数が増加している傾向にある。

弥生・古墳時代になると遺跡数は極端に減少しており、千本Ⅱ遺跡、三坂遺跡などが挙げられる。該期は松山平野部や仁淀川下流域といった低地への進出が著しく、上流域である久万高原町では遺跡はあまり発見されていない。近年、地元の方による現地踏査によって同時代の遺物が採集されているものの、依然として遺跡数の少なさに変化はない。

古代以降の遺跡としては、その大半は中世の山城であり、久万高原町一帯で認められる。久万地域は美濃土岐氏の所領の一角をなしたが、のち戦国期には、小田郷の大野直家が主家河野氏の求めに応じて久万に移り、東明神村と菅生村との境に屹立する峻峰の山頂に大除城を築いている。久万地域には、この大除城に属する20以上の枝城が残されていることから、一条氏や長宗我部氏といった土佐勢力に対する南の備えとして重要性を担っていた地域であることがうかがえる。しかし天正13(1585)年、秀吉の四国征伐の際、河野氏とともに大野氏も軍門に服し、大除城の役目は終わりを告げ、現在では、空堀や石垣などの遺構がその存在を証明するも、いまだ考古学的成果は得られていない。

(兵頭 勲)

参考文献

- 石野弥栄 1984『愛媛県史』古代・中世。
江坂輝彌・西田 栄 1967「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』平凡社。
愛媛県歴史文化博物館 2005『上黒岩岩陰遺跡とその時代』愛媛県歴史文化博物館。
小片 保・西田 栄 1963『上黒岩遺跡学術調査報告書』愛媛県教育委員会。
岡本健児・片岡鷹介 1967「高知県不動ヶ岩屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会。
潮見 浩・十亀幸雄 1983「愛媛県笛ヶ滝遺跡」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅵ』広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室。
多田 仁 2000「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧」『紀要愛媛』創刊号(愛媛県埋蔵文化財調査センター)。
多田 仁 2002「四国の尖頭器」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会。
多田 仁 2003「愛媛県における縄文時代の石器―草創期・早期・前期」『第14回中四国縄文研究会発表資料』中四国縄文研究会。
長井数秋 1973「愛媛県下の縄文遺跡に関する先史地理学的一考察」『ソーシャル・リサーチ』第2号。
長井数秋編 1975『山神遺跡』山神遺跡学術調査委員会。
長井数秋 2004『穴神洞・中津川洞発掘記録抄』愛媛県城川町教育委員会。
長井数秋 2006「上黒岩岩陰遺跡出土の古式土師器と弥生土器他」『ソーシャル・リサーチ』第31号。
西田 栄 1961「愛媛県下の縄文式土器についての一試論―中四国及び九州の接点としての在り方」『愛媛大学紀要』第6巻第2号。
西田 栄 1962「愛媛県上黒岩縄文遺跡第1次調査略報」『伊豫史談』164・165合併号 伊豫史談会。
西田 栄 1963「愛媛県上黒岩遺跡第四次調査略報」『伊予史談』第195号。
兵頭 勲 2006「北四国地域における早期土器研究の現状と課題」『第17回中四国縄文研究会 早期研究の現状と課題 前葉を中心に』中四国縄文研究会。
前田光雄 1996『高知県十川駄場崎遺跡第5次発掘調査』高知県幡多郡十和村教育委員会。
松村信博・山本純代 2001『奥谷南遺跡Ⅲ』(愛媛県埋蔵文化財センター)。
森 光晴 1990『宮ノ前・菅生台遺跡』愛媛県上浮穴郡久万町教育委員会。
山崎真治 2004「土器の様相」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器文化談話会。